

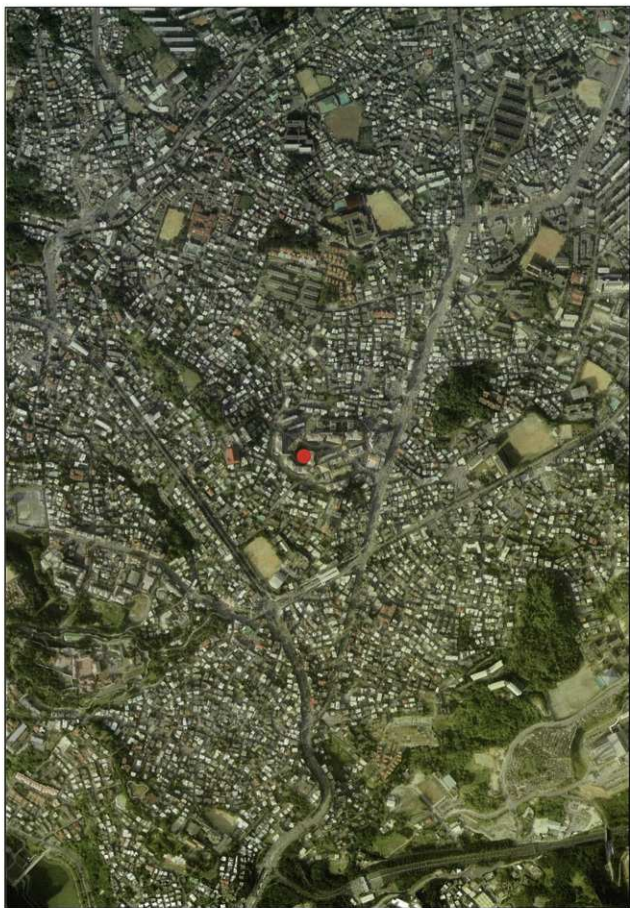
那覇市文化財調査報告書第93集

首里久場川壕群

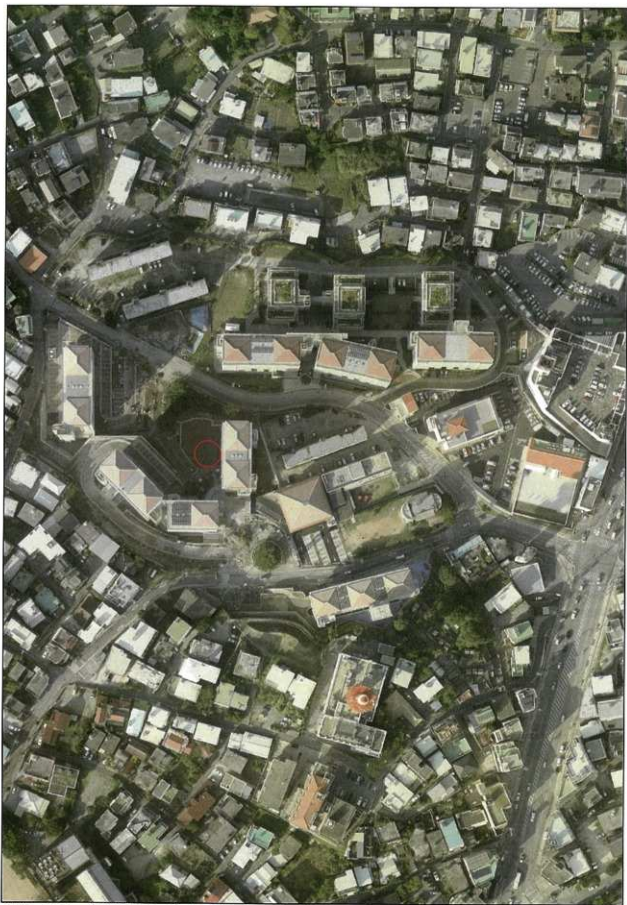
—久場川市営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告—

2012年2月

那覇市教育委員会



巻首図版1 遺跡周辺の航空写真(2011年撮影) 赤: 遺跡の位置



巻首図版2 遺跡付近の航空写真（2011年撮影） 赤：遺跡の位置

例 言

1. 本報告書は、平成 21 年度に実施した「首里久場川壕群緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は「久場川市営住宅建設事業」（久場川市営住宅第 2 期建替工事）に伴うもので那覇市建設管理部の補助執行を受けて那覇市教育委員会が実施した。
3. 巻首図版 1・2 は、株式会社パスコ（2011 年撮影）提供の航空写真を複写して使用した
4. 第 2 図は国土地理院発行のものを複製して使用した。
5. 図版 1・2 は国土地理院が保管している 1945 年米軍撮影の航空写真を複写して使用した。
6. 第 3 図は米軍作成地図（1947・1948 年撮影を元に 1948・1949・1951 年作成）を複製して使用した。
7. 第 4 図は本市建設管理部提供の工事図面を元に作成した。
8. 本報告書の執筆は玉城が行い、編集は山下真利子・請盛智秋・真栄城和美らの協力を得て玉城が行った。
9. 出土した資料については、すべて那覇市市民文化部文化財課で保管している。

目 次

巻首図版 1 遺跡周辺の航空写真 (2011 年撮影)

巻首図版 2 遺跡付近の航空写真 (2011 年撮影)

例言

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	調査体制	2
第1節	平成 21 年度の調査体制	2
第2節	平成 22 年度および 23 年度の調査体制	2
第Ⅲ章	調査の経過	3
第Ⅳ章	遺跡の位置と環境	3
第Ⅴ章	遺構	4
第1節	1 号室	4
第2節	2 号室	4
第3節	3 号室	11
第Ⅵ章	遺物	11
第1節	軍用装備品	11
第2節	工具・機械類	12
第3節	医療用品	13
第4節	日用品	14
第Ⅶ章	総括	18

報告書抄録

挿図目次

第1図	那覇市の位置	5
第2図	那覇市内の主な戦争遺跡	6
第3図	遺跡周辺の地図 (1948～ 1951年頃)	7
第4図	遺跡の位置	8
第5図	遺跡の平面図 (2号室)	9
第6図	認識票、腕時計、銃口蓋	19
第7図	ボタン	20
第8図	電球、乾電池、点火プラグ、 円盤金具、砥石	21
第9図	皮革製品、ライトカバー	22
第10図	アンプル、薬瓶、目薬瓶	23
第11図	碗類、灰皿	24
第12図	ビール瓶	25
第13図	壺	26
第14図	鉛筆、付けペン、万年筆、 インク瓶	27
第15図	髭剃り入れ、髭剃り、 化粧瓶	28
第16図	歯ブラシ、石鹸箱、ヘラ、 和鉄、把手	29
第17図	印章、墨石、印章入れ、 不凍液容器、クリップ、 キセル	30
第18図	銭貨	31

図版目次

図版1	遺跡周辺の航空写真 (1945年撮影)	33
図版2	遺跡付近の航空写真 (1945年撮影)	34
図版3	発掘調査の様子	35
図版4	発掘調査の様子 (2号室)	36
図版5	認識票、腕時計、銃口蓋	37
図版6	ボタン	38
図版7	電球、乾電池、点火プラグ、 円盤金具、砥石	39
図版8	皮革製品、ライトカバー	40
図版9	アンプル、薬瓶、目薬瓶	41
図版10	碗類、灰皿	42
図版11	ビール瓶	43
図版12	壺	44
図版13	鉛筆、付けペン、万年筆、 インク瓶	45
図版14	髭剃り入れ、髭剃り、 化粧瓶	46
図版15	歯ブラシ、石鹸箱、ヘラ、 和鉄、把手	47
図版16	印章、墨石、印章入れ、 不凍液容器、クリップ、 キセル	48
図版17	銭貨	49

挿表目次

第1表	出土遺物一覧	10
-----	--------	----

第 I 章 調査に至る経緯

本遺跡は、那覇市首里久場川町内（首里久場川町 18 番地ほか）において那覇市による久場川市営住宅建替え建設工事に発見された遺跡である。

久場川市営住宅ではこれまで建っていた住宅棟の老朽化に伴う建替え工事が順次進められており、当該地区においても既存の建物は撤去され、第二期工事として新たに建てる棟の基礎工事が進められている最中であった。既存建物基礎および造成土を撤去後、基礎布設前のボーリング調査において地下に空隙のある事が判明、何らかの人為的な工作物の可能性があったため、実際に掘削して今回の発見に至った次第である。

これまでの主な経緯を時系列でまとめた。

- 3 月 13 日 建築工事課より、市営住宅建設工事現場にて壕および人骨を発見したとの一報が文化財課へもたらされた。ただちに現場にて関係部局職員らとともに状況を確認。あわせて警察による現場検証が行われ、事件性はない旨の回答を得る。
- 16 日 自衛隊による危険物の処理が行われる。
- 17 日 発見に関してマスコミや市民団体について対応する。
他方、壕の取り扱いについて関係部局で協議する。
・ 結論の出るまで現地を保全する
・ 文化財調査を実施する方向で検討する
などを確認した。
- 18 日 建築工事課と文化財課とで壕の取り扱いについて協議する。
・ 壕上部の除去の方法
・ 調査スケジュール
などを確認した。
- 20 日 重機による壕上部除去（オープンカット）作業開始。
- 25 日 壕上部除去作業終了。
- 31 日 那覇市長より県教育長あて、埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第 94 条の進達依頼）が市教育委員会へ出された。
- 4 月 1 日 那覇市教育委員会から県教育委員会へ送付。同日、県教育長より那覇市長あて回答があった。これをもって発掘調査に着手する。

なお、今回の調査箇所発見に至る前に別地点においても同年 2 月 2 日に工事中に防空壕が発見され、現地を確認した。

第Ⅱ章 調査体制

第1節 平成21年度の調査体制

発掘調査を実施した平成21年度の組織の体制は以下のとおりである。

事業主体	那覇市	那覇市長	翁長雄志
事業所管	建築工事課	課長	
調査指導	那覇市教育委員会文化財課		
調査員	文化財課	副参事	島 弘
		主 幹	内間 靖
		専門員主査	玉城 安明
		専門員主査	仲宗根 啓
		専門員主査	北條 真子
		主任専門員	樋口 麻子
		主任専門員	當銘 由嗣
		専門員	知念 政樹
発掘作業員	発掘作業員は有限会社大満土建が直接雇用した。		

第2節 平成22年度および23年度の調査体制

事業主体	那覇市教育委員会	教 育 長	城間 幹子(平成22・23年度)
事業所管	生涯学習部文化財課	課 長	古塚 遼朗(平成22・23年度)
調査総括	文化財課	副 参 事	島 弘(平成22・23年度)
調査事務	文化財課	主 幹	内間 靖(平成22・23年度)
	文化財課	主 査	會澤 一大(平成23年度)
	文化財課	主任主事	仲宗根 建(平成22・23年度)
調査員	文化財課	専門員主査	玉城 安明
	文化財課	専門員主査	仲宗根 啓
	文化財課	専門員主査	北條 真子
	文化財課	主任専門員	樋口 麻子
	文化財課	主任専門員	當銘 由嗣
	文化財課	専門員	知念 政樹

資料整理

平成22年度

(遺物洗浄・ナンバーリングなど)

新城 京美 仲松 真智子 曾根 佳世

平成 23 年度

(遺物洗浄・ナンバーリング・実測・トレース・図版作成・集計など)

新城 京美 仲松 真智子 徳元 桐子

作業全般に亘って、特に図版作成・写真撮影などに下記のメンバーの指導・協力を得た。

国吉 真由美 金城 愛子 渡辺 幸夫

第三章 調査の経過

先の経過を経て 4 月 1 日より発掘調査に着手した。

先述のとおり、調査地は着手直前まで、既存建物地表面下厚さ約 2 m にわたって造成土が堆積、さらにその下に細粒砂岩（ニービ）層が堆積しており、遺構天井部はその岩盤層上面から 2 m 下位において構築された状態であった。安全面を考慮して予め造成土および遺構天井部分をなすニービの岩盤をオープンカットないしはハーフカットのかたちで除去して調査に臨んだ。

着手時点で現場は、警察による現場検証の際の人骨や遺留品確認採取のために、さらに自衛隊による危険物除去のためなどで掘り返されており、かなり荒れた状態となっていた。

まずこれらの攪乱部と覆土の除去から作業を開始。人骨とその周辺の遺物の露出作業をし実測作業を行った。確認された人骨およびその他遺物の検出面を第一遺構検出面として全体の写真撮影をし、実測作業を行った。

遺物を含んだ堆積層は思いのほか多量で、厚い所で約 30 cm であった。また遺物は折り重なるように密集し、場所によっては集積されたかのような状態もみられた。写真撮影と実測図化作業を終えた遺物については取り上げて下位の遺物の露出作業を行い、実測と写真撮影するという一連の作業を繰り返した。4 月 14 日に作業終了。現地における調査を完了し業者へ引き渡した。

第四章 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する那覇市は沖縄本島南部に位置し、面積約 39.23 km²、総人口 318,658 人（平成 23 年 1 月末現在）と県内最大の人口を誇る県庁所在都市である。市域は東シナ海に西面し、北は浦添市、北東から南西にかけて西原町および南風原町、南に豊見城市に接する。

本遺跡は那覇市首里久場川町地内に所在する。首里は琉球王国時代より王都として栄えたところで、往時久場川町は久場川村として、さらに北方の石嶺・西原方面からの王都への入口として位置している。現在では市街化に伴う地形の改変や建物の高層化などで本来の地形が分かりにくくなっているが、戦後 1945 年米軍によって作成された地図や写真（第 3 図および図版 1・2）

では、往時の地形を窺うことができる。これによれば、一見、首里城を中心とするいわゆる首里台地から北方の前田・経塚方面の台地の間の現在の石嶺方面にかけては低平な開地が広がっているが、仔細にみれば決して平坦ではなく、横断する安謝川の段丘を中心に細かな起伏を伴った地形が展開していることが分かる。

他方地質の面からみると、遺跡周辺は基層をなす島尻層群と那原層シルト岩（クチャ）と細粒砂岩（ニービ）の連続的な露頭が認められる。細粒砂岩は小禄から真嘉比地区を経てこの地や石嶺を縦断し、浦添・西原方面へかけて展開する岩石のことで比較的水はけの良さと加工のしやすさからこの岩石の露頭する所は墓所としてよく利用される。実際、周辺でもこの細粒砂岩の勾配地を利用して沖繩の伝統的な掘り込み墓が多数みられる。ただし当地の場合、不透水性のシルト岩と互層をなしていることから谷間低地や窪地において水捌けは悪かったものと思われる。

以上の点を考慮して改めて遺跡周辺をみると、北西方向へ二股に延びる丘陵の谷真奥に位置しており谷間は南北側から死角となっている。北側の開地を視準するには好適であったろう。さらに後背の丘陵頂部はそのまま首里台地の北東端からの外縁をなしつつ最も規模の大きな独立した丘陵であることから、本遺跡は首里城地下の第三二軍司令部にとっての最終防衛ラインともいふべき要衝であったことが首肯される。

第V章 遺構

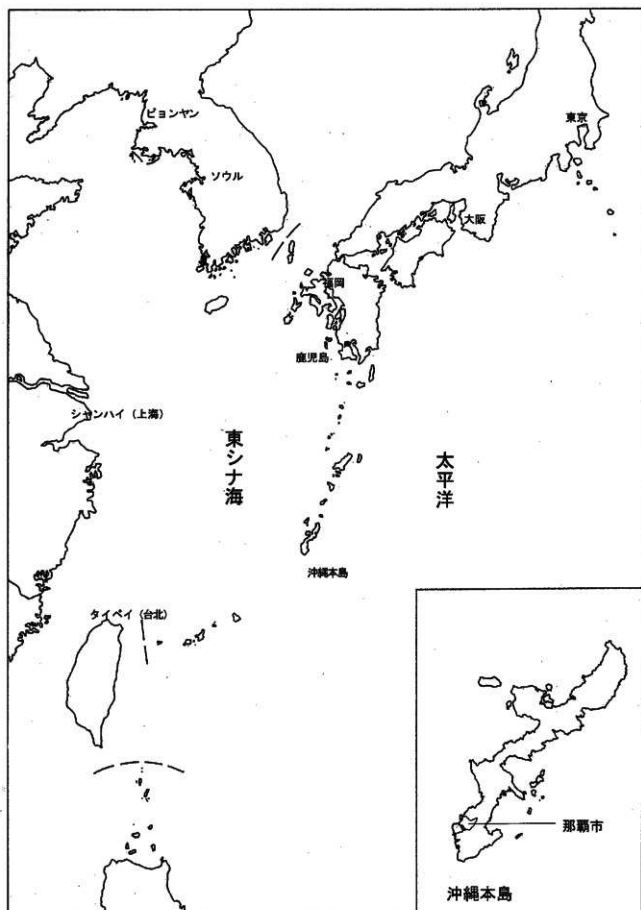
本遺跡はニービ（細粒砂岩）層を掘り抜いて構築された地下壕である。このうち今回発掘調査を実施した箇所は独立した三つの部屋とそれぞれを連結した通路からなる。部屋は南側から北へ順に1～3号室と仮称した。いずれの部屋もほぼ同じ方向に同じ規格で作出されたものである。またこれらは発見された時点で地表下約4mであったが、実際にはさらに高みを有する丘陵だったところである。実際の調査では、保存状態が良く、かつ遺物の出土量が最も多かった2号室をメインに行った。個別に記述する。

第1節 1号室

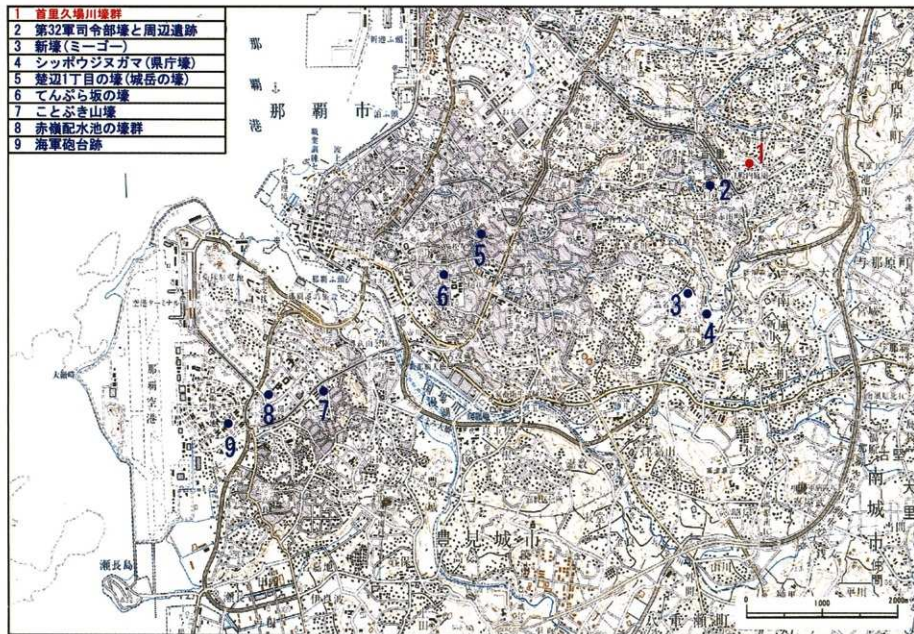
今回の調査で最も北側に位置する遺構である。土砂の流入が多く、また位置的にオープンカットの難しいこともあり、詳細な調査のできなかったところである。現状において人骨やその他の遺物は確認されなかった。

第2節 2号室

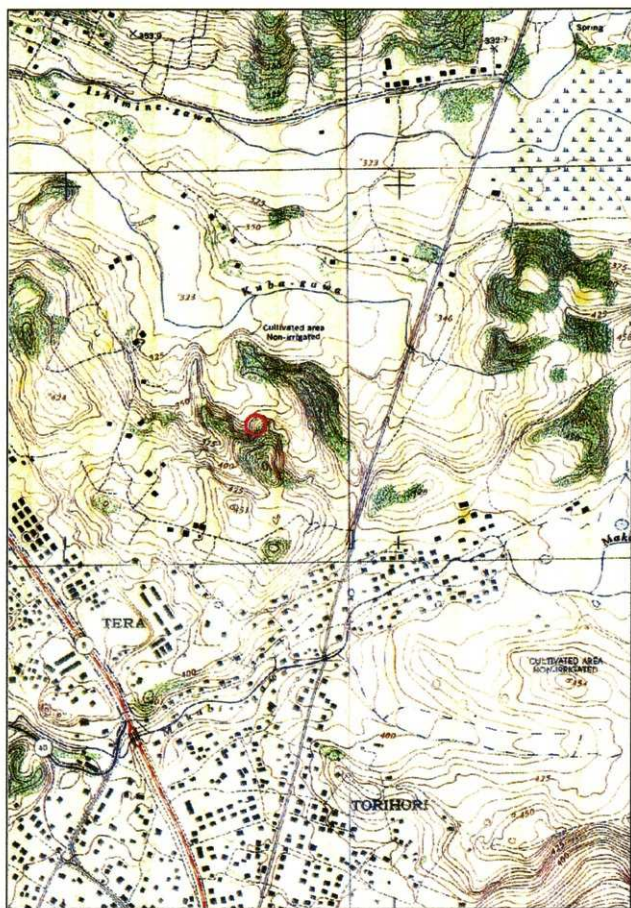
今回の調査でメインとなった箇所である。床から天井までの高さ約180cm、奥行き（部屋入り口の内側縁から部屋奥の壁まで）約4.2m、間口約3.8m、入口の間口は約1m、奥行き約1.8mを測る。平面形は総じて長方形のプランとなっている。内部は一見沖繩の伝統的な墓の墓室を思わせるもので地山を直接掘り込んでいる点でフィンチャー（掘り込み）墓の雰囲気を持つ。



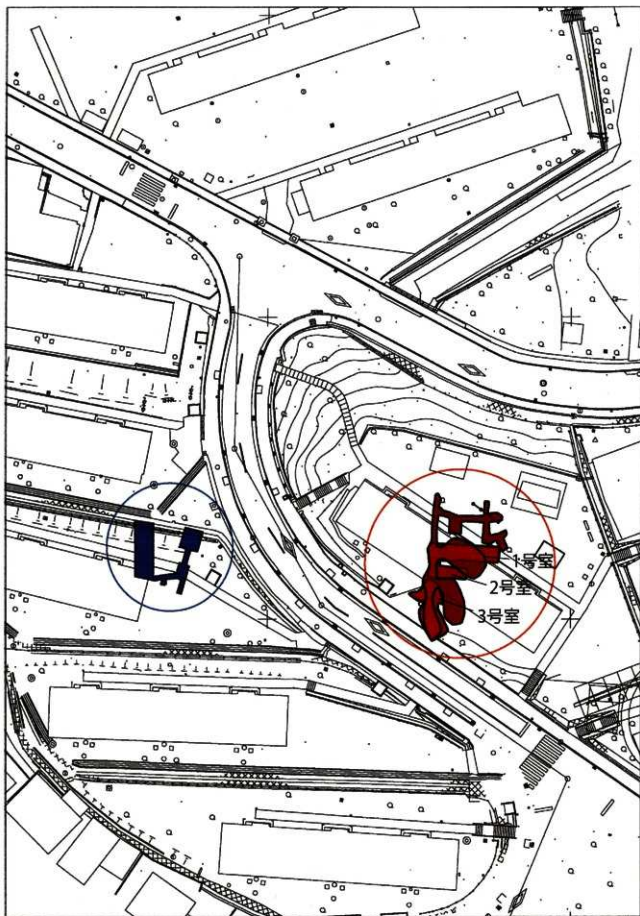
第1図 那覇市の位置



第2図 那覇市内の主な戦争遺跡

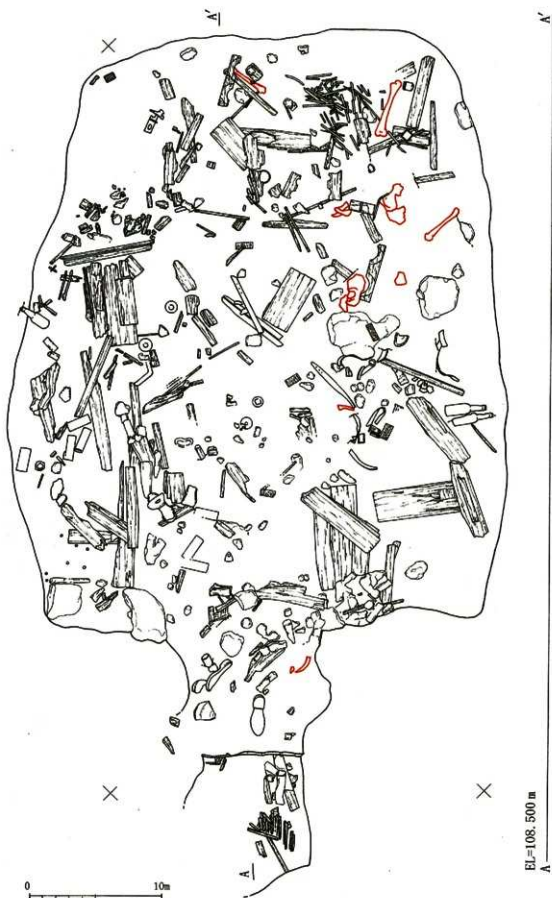


第3図 遺跡周辺の地図(1948～1951年頃) 赤：遺跡の位置



第4図 遺跡の位置 赤：遺跡の位置

(スケール1/300)



第5図 遺跡の平面図(2号室) 赤:人骨

第1表 出土遺物一覧

軍用必需品																											合計				
銃													銃具																		
金鋼製			プラスチック製			綿布製			皮革製				ゴム製				鉄製		木製		硝子製		真鍮製		ベークライト製			セルロイド製		硝子製	
銃	バット	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床	銃	銃床		銃	銃床		
4	6	1	69	2	12	44	20	9	35	7	2	109	3	1		7	1	1			3	2	3	1	3		3	345			

建築資材												工具・器具類										医療用品		合計
建築金具				構造材				不明		金具				電気器具				工具	器具	薬品				
鉄製		金鋼製		木製		不明		鉄製		不明		金鋼製		鉄製	鉄系二酸化マンガン （内訳あり）		金鋼製	硝子製	磁製	石製	ゴム製	硝子製		
バット	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘		
3	37	669	10	8	49	1112	10	72	23	5	1	5	2	2	1	4	14	1	1	1	1	4	5	2060

日 用 品																																							
文 具												近代磁器			常滑産	家具	食用品	洗面用具				磁器・漆器・包材・原料				炭煙具	不 明												
プラスチック製			金属製		セルロイド製		石版産	硝子製		木製		不明	磁製			常滑海産金属製		硝子製	プラスチック製		セルロイド製		硝子製	金属製	ステン レス 製	木製	木製	プラスチック製	プラスチック製		金属製	セルロ イド製	木製	不明	合計				
銃	下銃	万能銃	万能銃	ペン	鉛筆	消しゴム	鉛筆	インク	鉛筆	ペン	鉛筆	ペン	鉛筆	消し	消し	消し	消し	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆	鉛筆			
入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入	入			
2	4	3	10	1	1	1	1	1	4	1	1	2	3	1	3	1	1	1	1	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	23		

そ の 他																							合 計
銃 貨						木製品		ゴム類		不 明													
白銅	不明	白銅	銅	銅	銅	木製	ゴム製	プラスチック製	ゴム製	セルロイド製	セロファン製	金鋼製		硝子製	磁製	木製	磁製	不明	不明	不明	不明		
												金鋼製	硝子製										
																						金鋼製	
六十歳	五十歳	二十歳	満歳	二歳	一歳	六十才	七十才	不明	男	年輩	年輩	年輩	年輩	男	年輩	不明	年輩	不明	不明	不明	不明		
4	8	1	2	1	2	1	4	4	2	9	6	2	1	41	81	33	1	1	69	273			

部屋内壁には 構築時の掘削痕が残っておりあまり丁寧でない。造り付けの施設の痕跡はみられないが壁面上部に鉄釘がほぼ同じ高さに一定間隔で打たれている。

部屋右奥には人骨一体が検出された。発見当初の瞥見ではほぼ仰臥の状態と思慮されたが、前述したとおり警察による実況見分や自衛隊の危険物処理等で骨や周辺遺物が土ごとかなり取り出されたことで、原状は分からなくなった。そもそも部屋内部には夥しい量の遺物が泥に混じって堆積した状況となっており、これらは部屋の外から流入し一定期間浸かった状態であった可能性が考えられた。そのような中での原位置の特定は困難であった。

第3節 3号室

前述の2号室の南隣に位置するほぼ同規格の遺構である。調査前段のオープンカットにより、天井部分を全て除去した。遺跡発見時点で遺物は殆ど残っておらず、当初から空き部屋だったのかもしれないが、床面レベルは隣の1号室や2号室よりも僅かに高いことから、水の流入によって遺物が流された可能性も考えられ、判然としない。

第VI章 遺物

前章で述べたとおり調査のメインは2号室である。したがって出土遺物の殆どはそこから採取したものである。第1表出土遺物一覧に示した。これらを用途別に記述する。

基本的には南風原町での事例（註1）を参考に用途別に分類した。ただし本稿では用途が重複すると思われるものや用途そのものが明らかでないものもあって、あくまで便宜的なもので、あまり厳密ではない。

1 軍用装備品

直接戦闘に係る武器など。

2 機械・工具類

施設維持に係る機械や工具、備品など。

3 医療品

主に医療用とみられる容器など。

4 日用品

主に日常生活の中で使用したもの。主に個人の私物だが、官給品や支給品と思われるものも一部含まれる。

第1節 軍用装備品

ここに含めたものは本遺跡の性格を特徴的に示す遺物群である。

認識票（第6図1・2）

2点の検出があった。いずれも平板、楕円形で上下端に方形の孔を穿つ。同図1は「櫻三一〇九 高田久衛」と刻まれている。縦約4.5cm、横約3.3cm。厚さ約1mm。同図2は「櫻三一〇九 五番 三」と刻まれている。縦約4.6cm、横約3.4cm。厚さ約1mm。

腕時計（同図3）

直径約2.9cm（竜頭含まず）、厚さ約1cmのやや小振りの腕時計である。ラグの基部が僅かに残る。風防ガラスは割れており、腐食で内部の文字盤や針などは確認できない。外装などにメーカー名は見当たらない。

銃口蓋（同図4）

銃口への異物混入を防ぐためのカバーである。内部に金属と思われる（銃芯の一部か）ものが残存する。残存長約7.1cm。径約1.9cm。

ボタン（第7図）

本来衣服に縫い付けられていたものであろうが、衣服そのものは残っていなかった。いずれも作業用もしくは戦闘用軍服に使用されていたと思われる。径は概ね1.1～1.7cm。同図7・8は正装服に使用されていたものと思われる。前者には桜がエンボスされており、後者は模様が確認できない。どちらも腐食が著しい。径はいずれも約2cm。

不凍液容器（第17図4）

側部は欠失している。蓋も残っていない。金属製。高さ約6.6cm。

第2節 工具・機械類

電球（第8図1～3）

電球類をまとめた。具体的な用途は不明だが、懐中電灯や施設内の灯りなどが考えられる。同図1・2はフィラメント球。

乾電池（同図5～7）

芯棒とそれを円柱状に取り巻く外装からなる。同図5は最も残りが良い。芯棒長さ約7cm、径約8mm、外装長さ約5.8cm、径約3.8cm。同図6は上端の芯棒が折れている。外装長さ約5.6cm、径約2.9cm。同図7は芯棒のみの標品である。長さ約7cm、径約8mm。

点火プラグ（同図8）

磁器製の体部をエポナイト製のカバーで包む。体部に「NGK」の文字がある。残存長約

5.2cm。

円盤金具（同図9）

直径約 6.1cm の円盤で内側は隅丸方形となる。具体的な用途は不明だが、機械接続部分の部品であったと思われる。

砥石（同図10）

薄い板状で、途中で欠失した破片である。表面は平滑だが裏面には粗い打割痕が多数残る。現存長約 8.4cm、幅約 6.2cm、厚さ約 1.5cm。

ライトカバー（第9図2）

金属製の方形の薄い型枠に薄い白色のプラスチック板が裏側から重ねて嵌め込まれている。四方に小さなネジ穴があり両者は脱着が出来る。照明器具もしくは照明表示盤のカバー部品と考えられる。縦横共長さ約 8.8cm。

第3節 医療用品

ここでは薬品の容器をまとめた。

アンプル（第10図1）

ガラス製のアンプル瓶の破片である。胴下部は欠失しているが首は折れておらず、未使用だったのであろう。残存長約 4.8cm。

薬瓶（同図2～4）

同図2はメンソレータムの白色の瓶である。高さ約 5.3cm、直径約 4.2cm。プラスチック製と思われる。

同図3は扁平な茶色のガラス製で差し込み式の蓋受けとなっている。高さ約 7cm、幅約 4.2cm、厚さ約 2.4cm。胴部に「オソ」と陽刻がある。

同図4は清白色のガラス製。扁平な体部で、ネジ式の蓋受けとなっている。高さ約 8.4cm、幅約 5.4cm、厚さ約 3cm。底に「A」の記号が陽刻される。

同図6はほぼ透明なガラス製。やはり扁平な体部である。高さ（蓋込み）約 6.6cm、幅約 4cm、厚さ約 1.6cm。ネジ式の蓋が付いている。

目薬瓶（同図6・7）

上下に口を持つ両口式の点眼瓶である。上の口は広く下は小さい。下部の口から点眼する。同図1は点眼部のみにキャップが残るが同図2は上下にキャップを残す。法量は2点

とも長さ約 9.4cm (キャップ含まず)、幅約 3cm、厚さ約 2.6cm。

第4節 日用品

ここでは上記以外のもので使用者の想定できるものを主に扱った。共用品と思われるものや個人私物とがある。

碗類 (第11図 1・2・4)

3点を図示した。同図1は身と蓋セットのいわゆる蓋付碗。蓋に文様が描かれる。蓋の径約 8.3cm。身の口径約 7.8cm、高さ約 5.2cm。

同図2は筒形碗。口縁にグリーン色の圓線が二条入る。高台裏に「岐 4 9 8」の統制番号が付されている。口径約 7cm、高さ約 6.8cm。

同図4は蓋付碗である。蓋は無い。高台裏に「岐 1 2」とある。口径約 12.4cm、高さ約 5.4cm。

灰皿 (同図3)

型作りによる灰皿。上面には三箇所に煙草受けがある。内底は上げ底である。胴最大径約 12.6cm、高さ約 5.2cm。

ビール瓶 (第12図 1・2)

同図1は茶色味を帯びたガラスである。肩に「岐 TRADE © MARK」、胴下部に「BREWERY Co LTD DAINIPPON」と陽刻され、底面にも「☆」マークが陽刻されている。大日本麦酒株式会社製とわかる。高さ約 29.3cm。

同図2は青味を帯びたガラス製である。胴下部に「3D.LITER」と陽刻される。高さ約 24.8cm。他の種類の飲料品かもしれないが一応ここに含めた。

壺 (第13図)

頸部から肩部にかけての破片である。頸部から肩部へ直線的に開き折れ曲がって垂下する。把手の基部が残る。本標品では全形は窺えないが、南風原町での事例(註2)からすると口の窄まる寸胴形の約一斗の容量の壺である。

鉛筆、付けペン、万年筆、インク瓶、墨石を筆記具としてまとめた。

鉛筆 (第14図 1・2)

いずれも芯は残っていない。同図1はやや太目の軸、同図2は細身で「E ORANDUM」= 」とある。同図1は現存長約 10.2cm、径約 8mm、同図2は長さ約 9.6cm、径約 6mm。

付けペン (同図3)

同図3は直接インクに付(浸)け使用するタイプのペンである。薬品の攪拌棒とも考えたが一応ここに含めた。ガラス製である。軸に模様は無く、両端の先を尖らせただけのシンプルな造りである。長さ約16cm、径約8mm。

万年筆(同図4・5)

同図4は胴軸が折れ、キャップペン挿しも残っていない。メーカー名は不明だが、胴軸内部に細いシャフトが確認できることから、当時一般的であった国産のインキ止め(留め)式と呼ばれる独特の吸入方式だと分かる。ペン先はスチール製。軸は本来黒色であったと思われるが変色し鉛色となっている。おそらくエボナイト製であろう。また、胴軸はネジ切りで脱着できる二個の別ユニットで構成される変わったタイプである。ユニット内部に赤色の顔料が僅かに残っており、朱肉の可能性はある。長さ不明。幅(ペン側尻軸)約1.2cm。キャップ長さ約6.8cm、径約1.4cm。

同図5は前者よりやや小振りの、当時デコ式と呼ばれた軸側部のレバーによりインク吸入式の標品である。おそらくエボナイト軸。表面は素材特有の変色がみられる。ペン先はスチール製。ペン先に「BEST IN THE WORLD P I L O T MADE IN JAPAN < 2 >」とあり、キャップのペン挿し基部にも「PILOT」と刻印されており、現在も存在する国内メーカー、パイロットコーポレーションだと分かる。長さ不明。胴軸径約1.1cm。キャップ径約1cm。

インク瓶(同図6・7)

ガラス製のインク瓶である。同図6は胴部に「POPLAR」、底に「P」と陽刻される。戦前存在した国内メーカー、ポプラインキと思われる。高さ約6.4cm。同図7はメーカー名が見当たらない。高さ約6.8cm。

髭剃り入れ(第15図1)

柄「FEATHER」の文字とトレードマークの入ったオリーブ色の容器である。現在のフェザー安全剃刀株式会社前身、日本安全剃刀株式会社当時のものと考えられる。内部は髭剃りの受けが設けられており、先述の髭剃りの柄が納まることから、本来セットであったろう。型成形であることからプラスチック製と思われる。長さ約6.6cm、幅約5.2cm、高さ2.5cm(蓋付)。

髭剃り(同図2)

円筒状の柄のみを残す。造りはしっかりしており、滑り止めの細かな刻み模様が入る。ステンレス製と思われるが錆の付着がある。後述の髭剃り入れとセットであったと考えられる。残存長約8cm。

化粧瓶（同図3）

乳白色のガラス製の小瓶である。ネジ込み式の蓋受けとなっているが蓋はない。底面に「HM」のマークがエンボスされる。径約4cm、高さ約2.6cm。

歯ブラシ（第16図1）

植毛は残っていない。柄に「軍（カ）用 大阪（カ）工口 組合 6」と刻印が残る。セルロイド製であろうか僅かに変形がみられる。長さ約15.4cm、柄の幅約12mm、径約2cm。

石鹸箱（第16図2）

乳白色と赤色のストライプ柄のセルロイド素材の容器である。表面はシルクのような光沢があつて美しいが、いわゆるヤセによる変形と柄部分での剥離がある。長さ約6.4cm、幅約4.2cm。

ヘラ（第16図3）

和裁用のセルロイド製と思われる筥である。柄に紐通し孔がある。長さ約11cm。

和鉄（同図4）

同じく和裁用の鉄。刃に「サビナイ」と刻まれている。ステンレス製と思われる。長さ約9.4cm。

印章（第17図1）

蠟石のような軟質の石を用いた長方形の印影となる印章である。上部に紐通しの孔が穿たれている。個人用というより事務用のものかもしれない。文字は判読できない。長さ約3cm、幅約1.8cm、高さ約3cm。

墨石（同図2）

割れており残存状態は悪い。上面に「○」内部に「大」の文字を入れたマークが印刻されている。側面にも文字があるが判読できない。

印章入れ（同図3）

内部浅く刺りぬかれた木製容器である。裏面にごく僅かにシミのような黒味が見られるが、本来漆が塗られていた可能性がある。用途は断定できないが印章入りを想定した。長さ約7.4cm、幅約2.5cm。

クリップ（同図5）

表裏面が楕に近い形をしている。金属製で腐食が著しい。長さ約4.7cm、幅約3.4cm。

キセル (同図 6)

暗褐色を帯び、エボナイト製と思われる。表裏面にそれぞれ「二中隊三一〇九 積田」、「三一〇九部隊演習隊 積田」と手彫りされている。吸口側に噛み痕とみられる傷がある。紙巻きタバコ用と思われる。長さ約 7.6cm、幅約 1.6cm、厚さ 1.3cm。

把手 (第 16 図 5)

「C」字形の金属製の把手である。両端に身への留め具が残っており、元々、机か戸棚の引き出しに附属していたものが、身本体が朽ちてしまったものと思われる。長さ約 7cm。

皮革製品 (第 9 図 1)

長方形の革である。端には紐通しのためとみられる小孔が囲繞しており、別のパーツと編まれていたと考えられる。専用の収納袋だったのであろう。劣化が激しく細かな亀裂がみられる。残存長約 15.4cm、残存幅約 6.2cm。

銭貨 (第 18 図)

15 点を掲げた。銘および鋳造年の判読できるものでみると同図 1 の 2 銭硬貨が最も古く明治 10 年、最も新しいものが同図 15 の昭和 19 年の 5 銭である。

第Ⅶ章 総括

以上、遺構・遺物についてみてきた。工事中に地下での発見されたことで、安全面での配慮（例えば危険物・爆発物の可能性のある物品の移動、崩落などの危険があるため遺構をオープンカットのかたちでの除去など）での改変を受け、時間的な猶予がない中、夥しい量の十分な理解なしに取り上げざるを得ない状況にあり、遺跡の本来の在り様が分かりにくくなってしまった。また、資料整理において夥しい出土量且つ初めて取り扱う遺物にして十分な検討・分析が行えなかったし紙幅の都合で採録しなかった遺物も多い。よって今回の報告をもって十分な成果を示し得たとはいえず、さらにこれらの資料をもって遺跡の背景をも含めて考察するのは現時点では困難である。

沖縄県において、いわゆる「戦争遺跡」についての目が向けられてから存外久しい（註3）。そういった中で南風原町における「第三二軍司令部津嘉山壕群・津嘉山北地区旧日本軍壕群」で一連の発掘調査（註4）は先駆的な事例として挙げられよう。調査においてはまず当然調査方法が検討されるが、安全に調査が行えるよう対策を講じるのもそのひとつであるが、今回は特に次の点が大きな課題となった。

1. 天井や壁の崩落の危険 2. 酸欠や有毒ガスの危険 3. 爆発物の危険 4. 劇薬品や汚染水の危険

係る課題に対応するため磁気探査や遺構をオープン（露天）状態とする方法を採用した。時間的な制約の中で最善の策だと判断したが急場凌ぎの感是否めず、調査前に遺構を棄損するというジレンマを抱えてしまった。先の南風原町での事例は上記の問題を複合的に孕み得る最も困難な地下壕である。周到な準備検討がなされたであろう。その過程において調査での記録のある意味割り切りもあったであろうと思慮される。

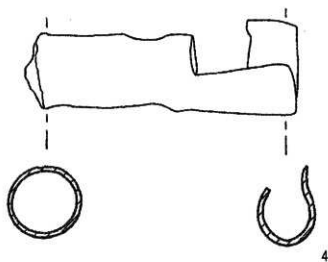
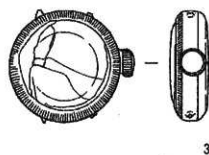
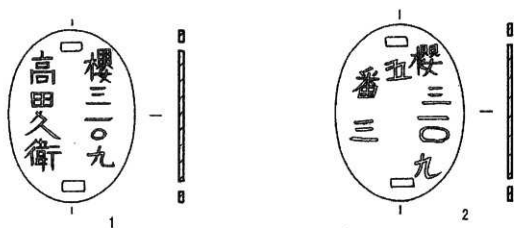
今回の調査は準備不足を痛感しつつも那覇市における戦争遺跡の初めての発掘調査である。今後当該期の発掘調査も増加していくであろう。調査の方法論の早急な確立が迫られている。現在を生きる我々が再び戦災を被ることがあってはならないのである。

註1：南風原町教育委員会『第三二軍司令部津嘉山壕群・津嘉山北地区旧日本軍壕群』2008

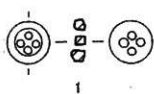
註2：註1に同じ

註3：富貴綱一「戦跡考古学のすすめ」『南島考古だより』第30号沖縄考古学会 1984

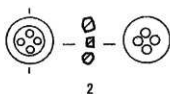
註4：註1・2に同じ



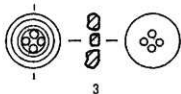
第6図 (図版5): 認識標 (1・2), 腕時計 (3), 銃口蓋 (4)



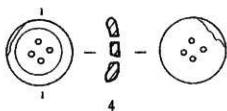
1



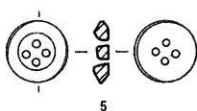
2



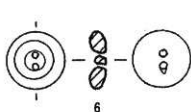
3



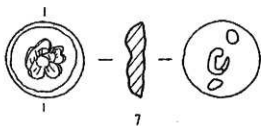
4



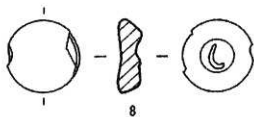
5



6



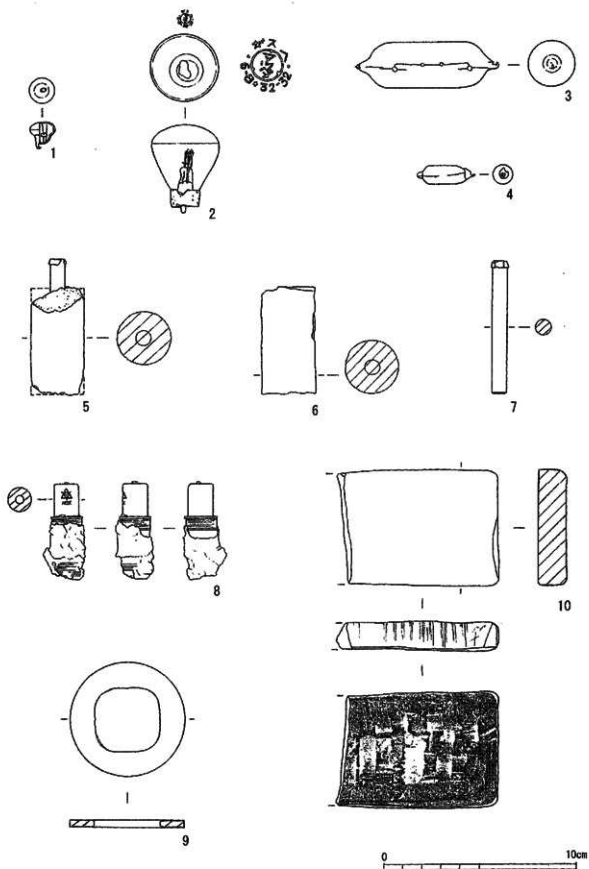
7



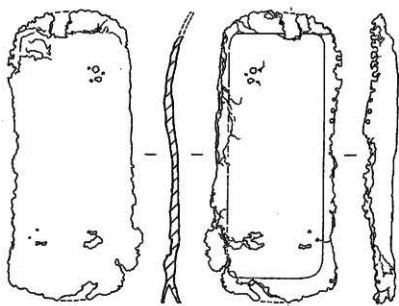
8



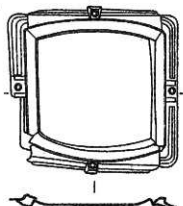
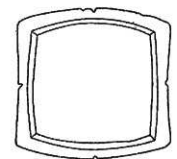
第7図(図版6): ボタン



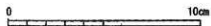
第8図(図版7): 電球(1~4), 乾電池(5~7), 点火プラグ(8),
円盤金具(9), 砥石(10)



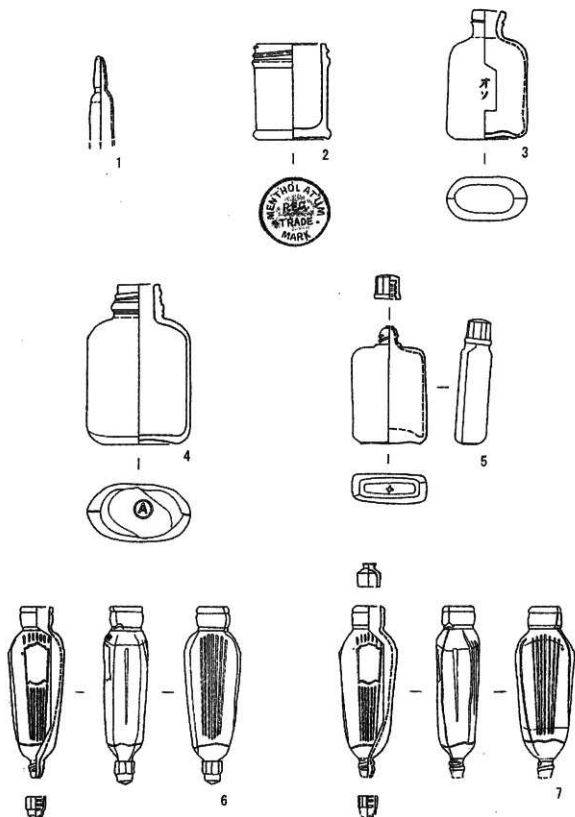
1



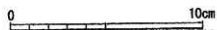
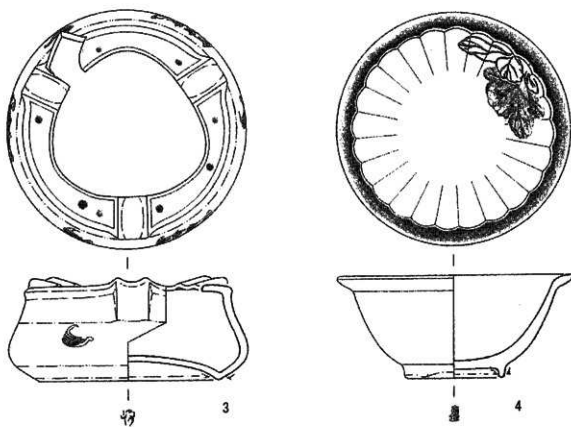
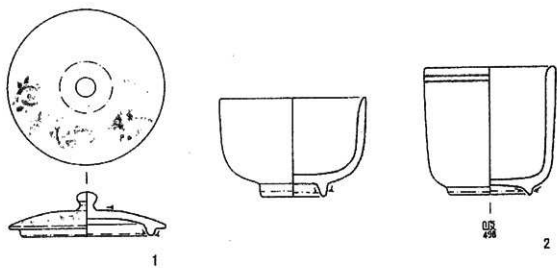
2



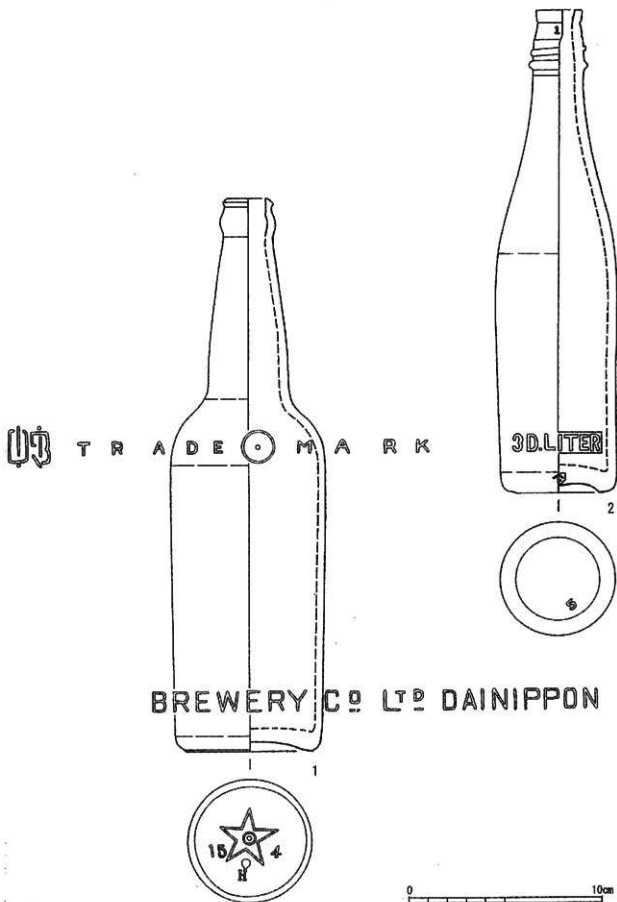
第9図（図版8）：皮革製品（1），ライトカバー（2）



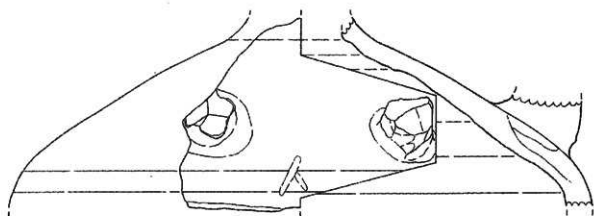
第10図 (図版9): アンフル (1), 薬瓶 (2～5), 目薬瓶 (6・7)



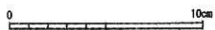
第11圖（図版10）：碗類（1・2・4），灰皿（3）

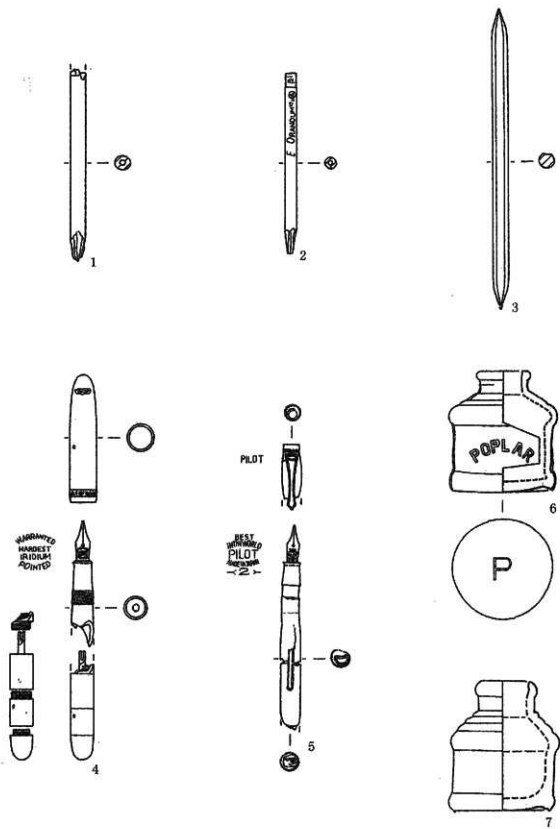


第 12 図 (図版 11): ビール瓶

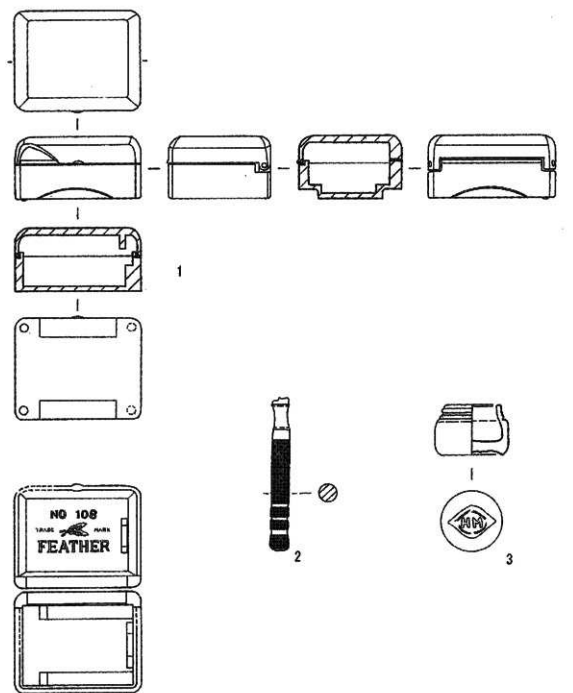


第 13 图 (图版 12): 壺

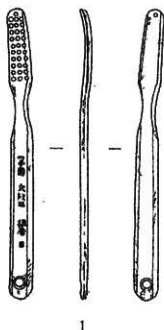




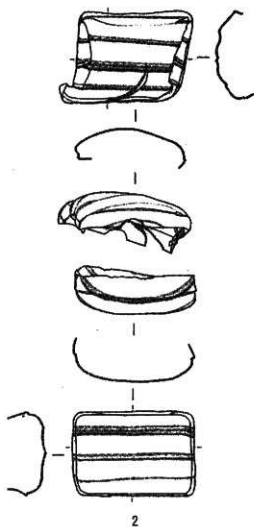
第14図 (図版13): 鉛筆 (1・2), 付けペン (3), 万年筆 (4・5), インク瓶 (6・7)



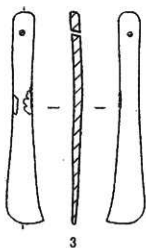
第 15 図 (図版 14): 髭剃り入れ (1), 髭剃り (2), 化粧瓶 (3)



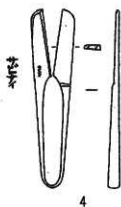
1



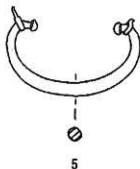
2



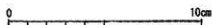
3



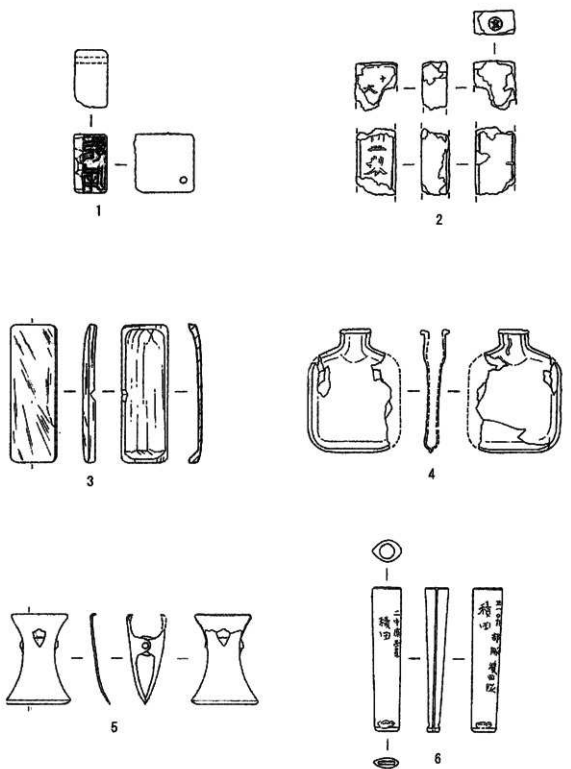
4



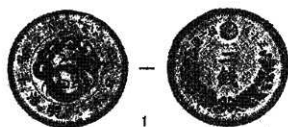
5



第16図 (図版15): 歯ブラシ (1), 石鹼箱 (2), ヘラ (3), 和鋏 (4), 把手 (5)



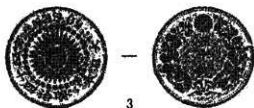
第17図(図版16): 印章(1), 墨石(2), 印章入れ(3), 不凍液容器(4)
クリップ(5), キセル(6)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



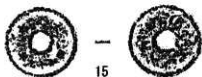
12



13



14



15



第18圖(圖版17): 錢貨

圖 版



図版1 遺跡周辺の航空写真(1945年撮影) 赤:遺跡の位置



図版2 遺跡付近の航空写真(1945年撮影) 赤:遺跡の位置



図版3 発掘調査の様子

1段目左:警察の現場検証

2段目左:天井部のオープンカット(1号室)

3段目左:関係者の視察

4段目左:発掘調査

1段目右:天井部のオープンカット

2段目右:天井部のオープンカット

3段目右:遺跡全景

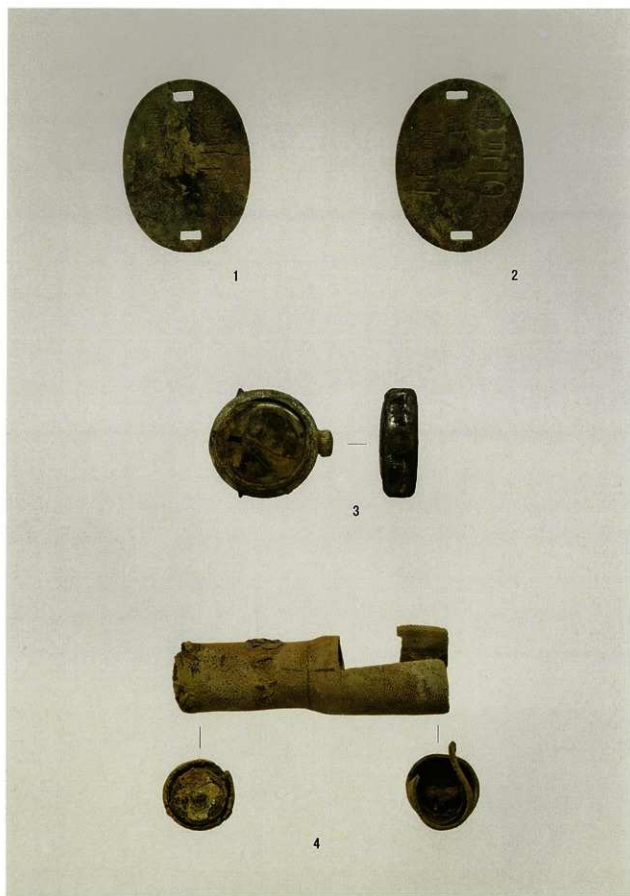
4段目右:発掘調査(右側3号室)



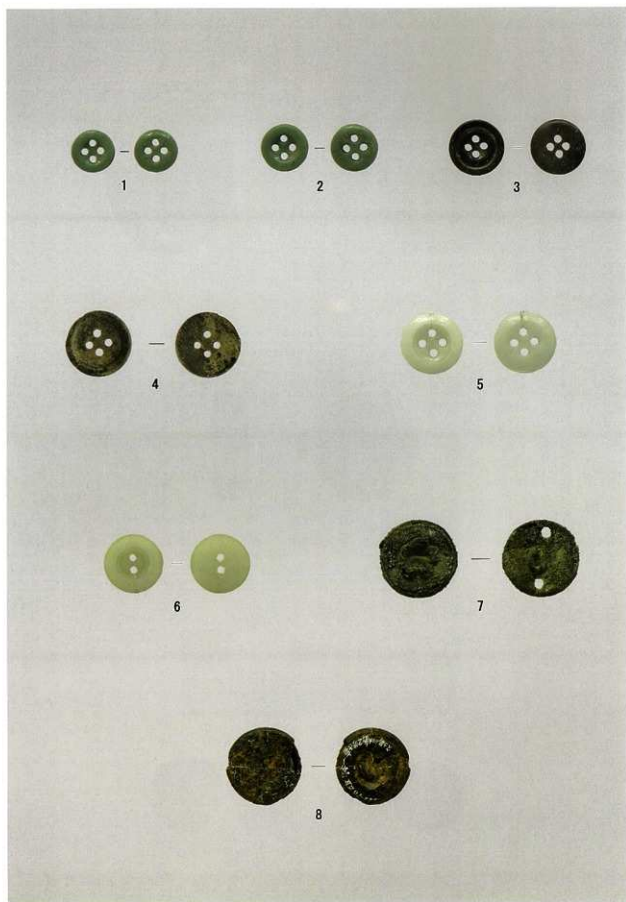
図版4 発掘調査の様子(2号室)

1段目左:発掘調査の様子
2段目左:遺物出土状況
3段目左:遺物出土状況
4段目左:遺物出土状況

1段目右:発掘調査の様子
2段目右:発掘調査の様子
3段目右:遺物出土状況
4段目右:遺物出土状況



図版5(第6図): 認識票(1・2), 腕時計(3), 銃口蓋(4)



図版6(第7図):ボタン



図版7(第8図): 電球(1~4), 乾電池(5~7), 点火プラグ(8)
円盤金具(9), 砥石(10)



図版8(第9図): 皮革製品(1), ライトカバー(2)



図版9(第10図):アンプル(1),薬瓶(2~5),目薬瓶(6・7)



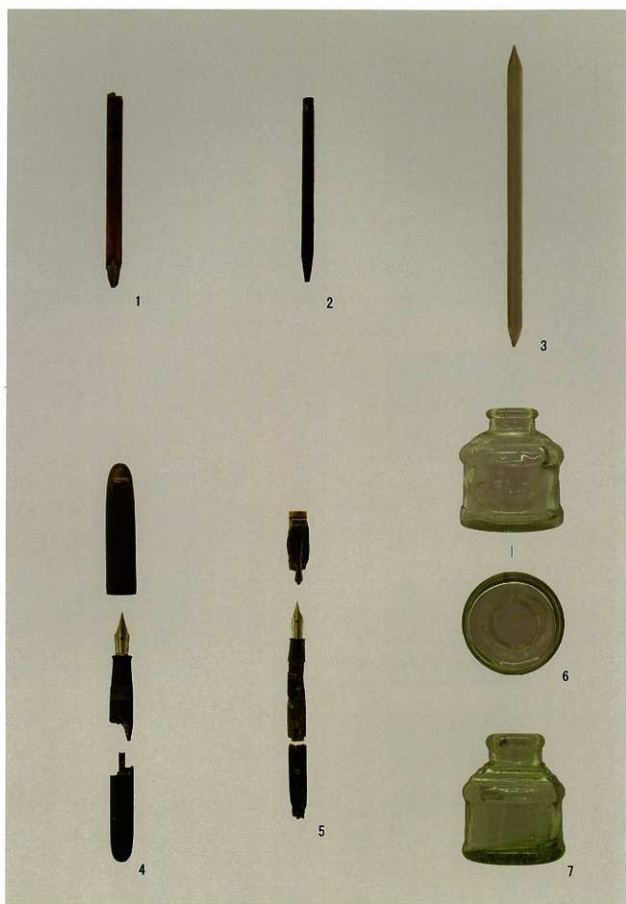
圖版10(第11圖):碗類(1・2・4),灰皿(3)



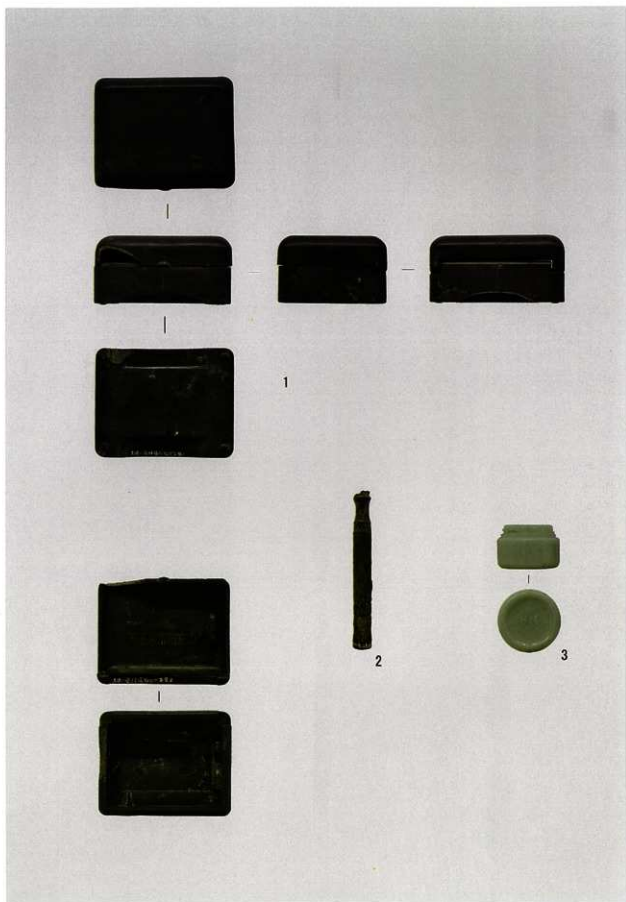
図版11(第12図):ビール瓶



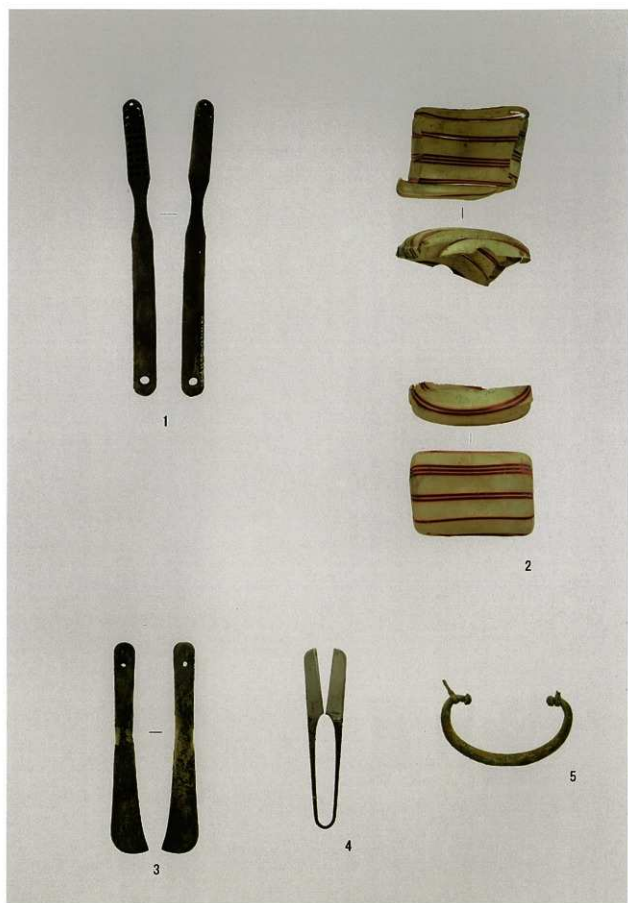
图版12(第13图): 壶



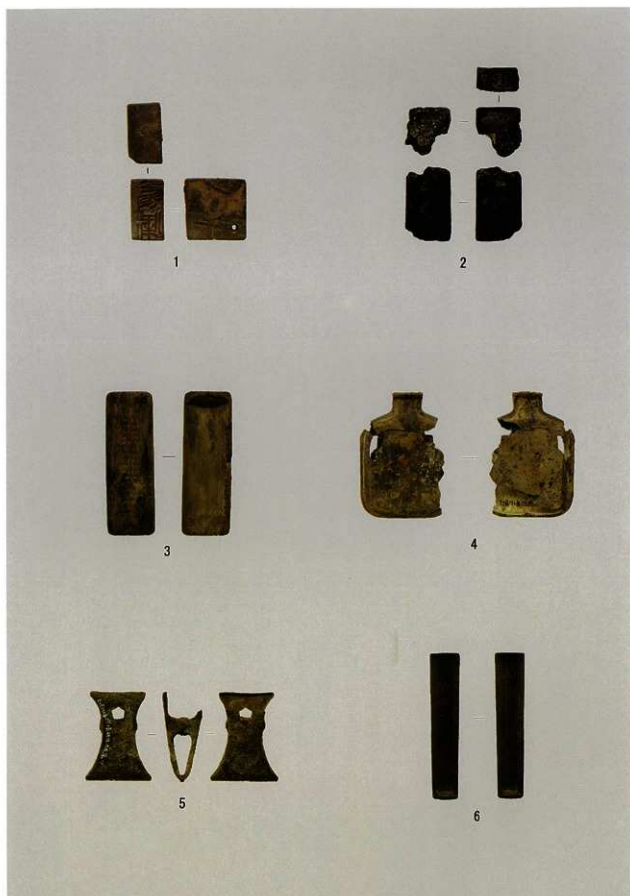
図版13(第14図):鉛筆(1・2),付けペン(3),万年筆(4・5),インク瓶(6・7)



図版14(第15図)：髭剃り入れ(1), 髭剃り(2), 化粧瓶(3)

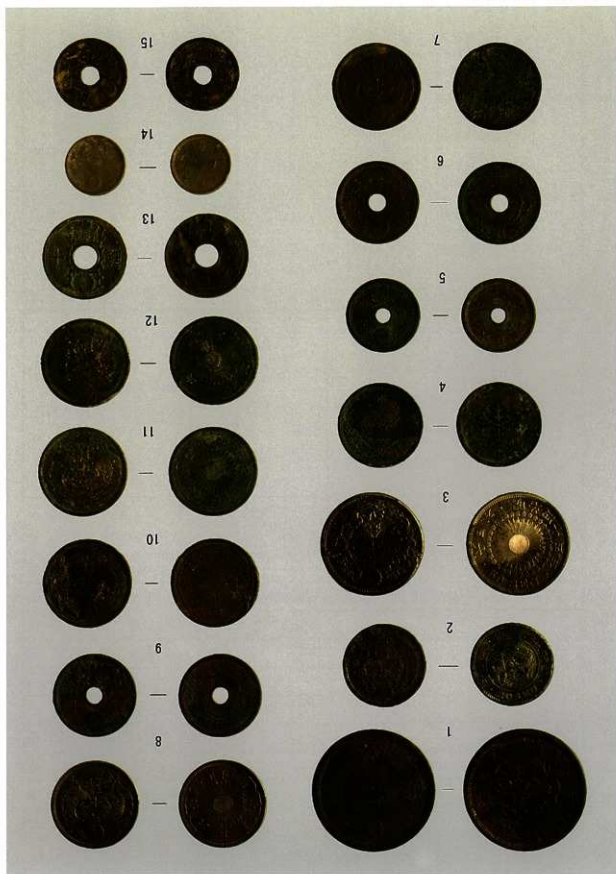


図版15(第16図): 歯ブラシ(1), 石鹼箱(2), ヘラ(3), 和鋏(4), 把手(5)



図版16(第17図): 印章(1), 墨石(2), 印章入れ(3), 不凍液容器(4),
クリップ(5), キセル(6)

圖版17(第18圖):錢貨



報告書抄録

ふりがな	しゅりくばがわごうぐん							
書名	首里久場川壕群							
副書名								
巻次								
シリーズ	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	玉城 安明							
編集機関	那覇市 市民文化部 文化財課							
所在地	〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 Tel. 098-917-3501							
発行年月日	2016年5月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
しゅりくばがわ 首里久場川 ごうぐん 壕群	なはしゅり 那覇市首里 くばがわ 久場川18番	47201		26° 13' 20"	127° 43' 27"	2009.04.01 ～ 2009.04.14	約30㎡	市営住宅建設工事に伴う緊急発掘
所収遺跡名	種別	主な時代			主な遺構	主な遺物	特記事項	
しゅりくばがわ 首里久場川 ごうぐん 壕群	旧日本軍陣地壕	近代 (沖縄戦)			機穴壕 小部屋	認謝票 胸時計 銃口蓋 ボタン 電球 乾電池 点火プラグ 円盤状金属製品 磁石 皮革製品 ライトカバー アンプル 薬品瓶 目薬瓶 など		

那覇市文化財調査報告書第93集

首里久場川壕群

—久場川市営住宅建設に伴う緊急発掘調査—

発行 2016年5月31日
那覇市
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市市民文化部文化財課
TEL 098-917-3501
FAX 098-917-3523

印刷 有限会社ダイヤプリント
〒901-0146 本社 沖縄県那覇市具志2-28-17
TEL 098-858-0909
FAX 098-859-0999
